

『主による望みを』 詩篇130篇

都もうでの歌

130:1 主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばれる。

130:2 主よ、どうか、わが声を聞き、あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。

130:3 主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができましょうか。

130:4 しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかしこまれるでしょう。

130:5 わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。

130:6 わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。

130:7 イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがあるからです。

130:8 主はイスラエルを、そのもろもろの不義からあがなわれます。

●主題

- I. 深い淵から神を呼ぶ
- II. もろもろの不義と神のゆるし
- III. 不義からの神のあがない

●序論

ひとりの黒人牧師のお話。

荒れ果てた生活の末…今夜ばかりはおしまいだと恐怖におびえ、弾丸の雨の中で死ぬさまを想像しながらも、そこで最後にもう一度だけ、彼は神を仰いだのです。

「イエスよ、俺を助けてくれないか？」彼は小声で言った。

この話を聞いたジャーナリストの人は、すぐにはそれを受け入れることはできませんでした。人がそう簡単に変わるはずがない。長くいろいろな人を見てきたジャーナリストのその人には、不信感がありました。

しかし、その後の長い時間をかけた彼との付き合いでわかるようになっていくのです。

神はその愛をもって、この人をも赦し受け入れ、作りかえられると。

今日の御言葉にはこうあります。

130:8 主はイスラエルを、そのもろもろの不義からあがなわれます。

「主は、わたしをそのもろもろの不義からあがなわれます。」と。

ここにこそ望みがあります。

## ●本論

### I. 深い淵から神を呼ぶ

130:1 主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばわる。

130:2 主よ、どうか、わが声を聞き、あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。

「深い淵」という表現は、様々な深刻な状況やまた心情を想像させます。

深い淵のどん底からは周囲にそびえる壁の存在によって、決して自力では這い出ることができないありさまです。

「都もうでの歌」とありますが、これは当時のイスラエルの民が捕囚から解放されて、都を再建するために帰ってきた時に読まれた歌だと言われています。

そしてこの歌には、彼らの悔い改めの思いが込められているのです。

それは自分たちではどうしようもできないような状況の中で、本心に立ち返り、ただ神を求めようになった人の姿は、イエスさまの「放蕩息子」のたとえを思い出します。

…そのとき、聖書は語ります。彼は、「我に返った」「本心に立ち返って言った」と、  
15:17 …『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしてしている。

15:18 立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。

15:19 もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。

そういう覚悟で帰ってきた時、そこには自分の帰りを待っててくれた父がいた。

私たちはしばしば、本当に追い詰められないと、自分の罪が見えない。気づかない。また認めようとしない…ということがあります。

この放蕩息子はまさに、貧しさと飢えの果てで、「我に返った」のです。

そして、そうやって帰ってきた息子に対する父は、けっしてその罪と責任を問い詰める方ではなく、無条件に赦して迎え入れてくださる存在でした。

これがすなわち聖書が語る、父なる神の姿です。

「深い淵」は不幸と絶望、自分の力の限界と、人の思うすべての解決の虚しさを語ります。しかし、真の神を知る者は、そこでこそ我に立ち返り、すなおに神のもとに行くことができるのです。

### II. もろもろの不義を知る神に

130:3 主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができますでしょうか。

130:4 しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかきこまれるでしょう。

「もろもろの不義」 新共同訳聖書では、「罪をすべてここらにとめられるなら」とあり、英語では、「もしあなたが、私たちの罪の記録を保存しているなら」とあります。

…むしろ、神から逃げなければならぬでしょう。

ここで、聖書は「あなたは、恐れ畏（かしこ）まれる」と記します。

しかし、それは、そんな罪を糾弾されて…というわけではありません。それでも神さまはゆるしくださるからだ、というのです。

責め立てる神ではなく、赦す神がここで証言されています。

ここで自分はどうかのか…と問いなおすことの大切さを思うのです。

聖書がはっきり証言します。

ロマ3:10「義人（正しい人）はいない、ひとりもない」。

その上で、聖書は私たちの過ちやごまかしを責め立てるではなく、聖書は「私たちに向けられた神のゆるし」を語るのです。そこまでご存知なのに、赦してくださる神がおられるのです。

130:4 しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかしこまれるでしょう。

### Ⅲ. 豊かな贖いがある

皆さんは、ご自分の罪について悩んだことがありますか？

そんな時どうするのでしょうか？

多く人は、自分を変えようとします。良い生き方を学び、また生活改善を試みます。こんな風に考えるのです。これは自分の弱さだと思い、自分の信仰が足りないからだと思ひ、神さまだけを見てこなかったからだと思やむことがあります。

でも神さまの側は違います。

そのすべての罪について、ゆるしを用意して、わたしたちを迎えようとしてくださっています。

実は、わたしたちは、自分を見つめ、罪を見つづけているために、自分の無力さや欠点ばかりに心が向いてしまって、この神さまが忘れられてしまっているのです。

神さまは、わたしたちを愛してわたしたちの罪のありさまのすべて包み込んでゆるし、癒してくださるお方です。だから今日の詩篇は語ります。

130:4 しかしあなたには、ゆるしがあるので、…

130:5 わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。

そこにゆるしがあるからです。

自分の罪を無くしてから…ではなくて、その解決できない罪を抱えたまま神さまのもとに行くことなのです。

そこに神は豊かな贖いを用意してくださっているからです。

130:7 …主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがあるからです。

「贖（あがな）い」は、だれかを奴隷状態から解放するために、神の側が相応の代価を払っていることを意味します。

だから、人生のどん底のどん底でも、口にすることができるのです。

「イエスよ、俺を助けてくれないか？」と、神さまに心から訴えることができるの

です。

罪のどん底の末に、彼が本当に行きついたのは、イエスさまを求めるほかない…  
その他にはないというところでした。

わたしたちは、自分の罪や過ちを自分で何とかしようとしてできない自分を責め、できない  
でいることが苦しくて、いつの間にかごまかし、そしてそのことに触れることも考えるこ  
ともやめてしまう。

でも、そんな私たちに聖書は、こんな風に語ります。

1ヨハネ1:9 もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかた  
であるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。

だからこうも語るのです。

ローマ6:11 (新共同訳) このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいる  
が、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

「わたしたちは『罪に勝つ』ようにとされているのではありません。

それはわたしたちの出来ることではありません。

むしろ、『罪に死ぬ』つまり罪に思いを馳せる生き方をやめて、そのまま神さまのもとに行  
ってしまえばいいのだ…とされているのです。

そこには、主が用意してくださったいつくしみがあり、豊かな贖いがあるから、わたした  
ちの罪はすべてゆるされ、わたしたちは解放されるのです。

130:8 主はイスラエルを、そのもろもろの不義からあがなわれます。

イエス・キリストの十字架を前に、わたしたちはただへりくだるのみ、それを受け取るの  
み、そしてその完全な贖いとゆるしを受け取る者とされていることを感謝しましょう。

そして告白できるのです。

130:5 わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、  
わたしは望みをいだきます。